

十五年に酪農に夢を持ち、始めたが、今は乳牛も二百頭の規模になり、やっと長い旅路も七十五歳を迎えることができた。

シベリア抑留記

岐阜県 坂井文介

拉古收容所へ集結

密林山岳に立てこもっていた日本軍将兵は、軍司令部の命令の呼びかけにより、朝までにあちらこちらから横道河子の広場に集まってくる。いずれも哀れな姿である。敗戦の惨めさを目の当たりに見ると我慢がしきれない。敵陣に切り込んで暴れたい気持ちである。一度、山岳に難を避けて機をうかがっていた将兵が、あきらめて山を降りて来る。私たちはまる一昼夜食事にありつけなかったが、ようやく乾パンが渡されこれをお茶もなしに喰えをしのぐだけの給食であ

る。私は、北支の戦地で塩のないつらさをつくづく味わっていたので、家を出るとき塩を軍足に入れて、これを携帯していた。これを少しずつなめた。野原に集結してくる日本軍が日に日に増えてくる。三百人くらいの一集団を作り、やがてもと来た牡丹江への道を引き返せというソ連側の命令である。

もうこの頃からは日本軍の将官、佐官クラスはどこかに姿を消していた。尉官、下士官兵といった集団で、この頃はまだ階級章は守られ、我々は第五軍司令部福島大尉が集団の長となっていた。

無防備、身軽な装具である雑のうと飯盒という生きるのみの携帯品を身につけての行軍が始まったのである。自動車も軍馬もソ連軍に徴発してしまった。ただし給与関係の一部の者には馬と荷車を使用することを許された。横道河子の数日は夢のように過ぎた。

いよいよソ連行きの捕虜行である。煮えくり返るような悔しさの毎日が続く。牡丹江への道を再び引き返して行く。数日前車で走った道であるが、もはや初秋の草花が美しく咲いているのを見ることができた。

拉古、そこは日本軍の病馬廠があったところである。広い草原の丘の上に兵舎があった。鉄条網を巡らした兵舎は、今や日本軍の捕虜収容所と化した。軍馬の姿は一頭もない。ソ連軍や満人に全部略奪されてしまったのである。

ガランとした兵舎に割り当てられた我々の集団はひとまず収まった。そしてここで色々の憶測をしながら数日が過ぎた。あるときソ連人将校と通訳らしき者が現れた。ソ連人将校は次のように通訳を通じて話をした。「明朝この梯団約二千人は、徒歩にてここを出発して東方に向かい、ウラジオから日本へ帰す」ということであった。通訳とソ連人将校は牡丹江、ボグラニチナヤ（綏芬河のこと）を経て国境を越えてソ連領に連れて行くのだと話していた。兵たちは喜んで、本当に帰国できると信じていた。

私はこの甘い兵たちの考え方をそつとしておいてやった。逃亡するならば今かも知れないが、しょせんは無理と判断してあきらめソ連行きを覚悟した。

無念!! 死の俘虜行軍

昭和二十年九月二十三日頃と思われる。朝、約一千人ずつの梯団が編成された。まだこの頃は軍人の身分として階級章のみはつけていることを許された。しかし何らの武器も持たない一個の人間として扱われた。

いよいよ第五軍司令部の電報班長福島大尉が梯団長となった。私はたった一人憲兵曹長としてこの梯団の中に入った。いよいよソ連に向かっての戦のなき行軍が始まったのである。

やがて朝晩は秋風が肌に冷たく感じるようになった。夏服のままのいでたちである。隊の前、中央、後にと数十人のソ連の兵隊がマンドリンを構えての監視行である。ある陸軍の官舎街に着いた。何時間歩いたことか、そこで小休止である。

隊列を壊すなという。そのまま腰を下ろしての休みだけは許される。陸軍の官舎には美しいコスモスの花が咲いていた。庭先には住んでいた人が作ったのであろう花畑がきれいに並んでいた。海林カラ古の部隊の営外居住の将校、下士官の官舎であらう。かつては

平和な官舎地帯での生活が思い出されて淋しさをそそる。門札はそのままであるが、家屋の中は荒らされ、硝子戸は外され、畳は持ち出され荒れ果てたまま。ソ連軍か満人かが略奪して行ったのであろう、初秋の風が冷ややかに吹いている。怒りと悲しみがこみ上げてくる。武器のない今、如何ともしがたいし、忍耐より途なし。再び行軍が開始された。牡丹江市街に入る手前から隊列は右に折れて進む。それは牡丹江の国道橋が爆破されているので海浪の方面を回るのである。

牡丹江市街は、かつては東滿隨一の街として、省公署をはじめ、諸官衙あり映画館あり、繁栄を極めた市街も、一カ月を経た今は全くの死の町となってしまうた。

間もなく、かつては日本軍の飛行場があり、若干ながらでも軍用機が離着陸していた海浪の街に入ったが、今では一機の機影すら見ることはできない。この辺りは集中してソ連の自動車、戦車が通過するために、デコボコ道となり泥沼のような様相を呈していた。

飛行場に山と積まれたドラム缶、焼け果てた敗戦の光景を見ると、ますます無念さがこみ上げてくる。歩行さえ困難となった泥沼の道、そこを通り抜けて上り勾配の道を進むと、こんもりとした青い森が見えてきた。ここがかつては第五軍司令部と陸軍病院があった掖河の街である。

軍司令部の建物もそのまま、破れ壊れた硝子戸も哀れに荒れ果てた姿になっていた。

ありし口は妻と通いし酒保の道

今捕らわれて行くぞ悲しき

ここは軍司令部の官舎の人たちが、毎日、日用品を買い求めに歩いた道である。一カ月前までは平穏で美しい緑の街であった。しかも帝政ロシア時代の建物、異国情緒のある風景は今も心の奥に残っている。右手のなだらかな丘に二、三百軒の赤煉瓦の陸軍官舎がそのまま並んでいた。

やがて綏芬河への国道線に出る。掖河を過ぎるとかつては激戦の地であった磨刀石の部落である。ここはかつて岸壁の母で知られた有名な、端野いせさんの息

子新二さんのいたところである。我々はそんなことも知らずに黙々と追われる牛のごとく歩を進めて行った地点である。

その頃、突然隊列の前方でババーンという自動小銃の音がした。不思議に思った。間もなく我々の隊列から一人の兵が用便のために離れたところを射殺されたのだと聞かされた。死んだ兵はそのまま野原に転がされ、葬ることもなく捨てられた。どこの誰であったか名も確認されず、哀れまさに犬死にである。人の命をこれほどまで粗末に扱うソ連人の人間性を恐ろしく思った。

その頃から私も強烈な下痢に悩まされた。歩きたびに用便を訴えるがなかなか許されない。歩く兵たちも大勢がこの下痢にかかった。軍人の意地としても他人の世話にならない、自分の力で歩くことに努めた。しかし遂に力尽きて糧秣を積んだ荷馬車に乗せてもらったが、金輪の震動がガタガタと体に無情なほど、頭の芯まで痛い。下痢はなかなか止まらない。やがて靴の中の足が痛み出した。私はやむなく断食を覚悟した。

集団の中での下痢は大勢に広まっていった。もはや死の恐怖が迫っている。車にしがみついていることも困難である。

やがて夕暮れが迫る頃、広い丘の上に出た。今晚はここで野宿するという。車から降りた足が痛んで歩けない。靴を脱いで見た。白かった軍足に血がにじみ出てどす黒い色を見せている。足の裏は紫色になって皮がむけて、これからの行軍に耐え切れるであろうか。丸一日は何も食わずに断食をした。どうにか下痢の方は快方に向かっているらしい。

やがて細鱗河という丘に出た。そこで梯団は野宿をとれという。それぞれ若干の米を持っていたので、飯盒で飯を炊いた。副食物は何もないので僅かな食塩をとってしのいだ。飯盒の水を小川に取りに行ったら、流れの中に名も知らぬ美しい小魚が群れていた。大自らは戦禍の中にも平和である。

いよいよ野宿。ソ連兵の厳重な警戒の中に並んだままのごろ寝。夜となるともう満州の広野は寒気が迫っている。逃亡を警戒するソ連兵はマンドリン（自動小

銃)を肩にしながら、深夜に至るも我々の集団を監視する。草原に夜露が降りて、頭からすっぽりかぶった携帯天幕が重くなる。妻子、父母、古里の面影が夢に出てなかなか眠れない。

一夜明けると草原は実に美しい大自然の景色となる。朝食はなのまますぐに歩けという。再び東へ東へと徒歩行軍の始まりである。ソ連軍の自動車は満州からの略奪物資を山のように積んで輸送している。汽車も自動車もあらゆる交通は兵員を輸送することはできない。

やがて満ソ国境の街綏芬河である。かつて有名な国境の町のモデル地帯である。ここは日本軍も駐屯して要塞的な陣地もあった。元シベリア鉄道の終点であるが、満州側とソ連側との鉄道がいつでも接続できるようになっているところであった。盆地のようになつた街を通ると、いよいよ東方国境線に向かって上り坂となつている。小高い丘の左手にキリスト教会が建つていた。硝子窓は破れ飛び、無残なほどに銃砲弾の犠牲となつていた。

国境、ここが満ソ国境である。ソ連領からの鉄道が山の中腹でぶつ切り切れている。かつては互いに国境監視隊が出て、嚴重に警戒されていた地帯である。今では何のわだかまりもない同じような山の連なりである。

満ソ国境を越えてソ連領に入る

国境線から道は下り坂になる。二キロメートルくらい下がったところに五十坪くらいの兵舎がぼつんと建つていた。かつてはここから綏芬河の国境監視隊の歩哨が出ていたのであろう。

ソ連領に入るととたんに道が悪くなる。荒れ果てた寂寥たる草原で、雪でも降れば実に淋しい広野である。満州領の道路網は完備し、満州はいかに活力のある楽園であつたかがうかがえる。既に幾日を歩いて来たことか、足は痛み、もはや生きる望みを失つた兵達があちらこちらで倒れる。ソ連軍は力のない兵を荷馬車に乗せろという。野に伏し山を歩き、ソ連領に入つてもなかなか民家はない。黙々と歩く元日本軍の姿に

哀れさを感じる。

毎日の食糧はもはや底をついた。支給されるべき米もない、麦もない。梯団の本部はソ連側に交渉しても食糧は何も支給されない。毎日衰弱者が出る。ある日、丘に出た。当分ここで野宿だという。もう空腹に耐え兼ねて動く元気もない。間もなく梯団にアメリカから来たきんとん豆というものを若干支給された。本部では大きな鍋でこれをスープにして、僅かながら各人の飯盒に分配するのである。飯盒に貰ったスープには赤い豆が十粒くらいしかない。とても空腹を満たすことはできない。さらに、草原の真ただ中で寝よという。たった一枚の毛布を支給された。十月にもなるともうソ連領では冬のきざし、夏服と毛布一枚では寝ていても眠れない。砂漠を追われる羊の如く黙々と歩き、毎日生命の極限に挑み危険にさらされての日々である。

どこまで連れて行くのであろう、運を天に任せての毎日である。既に十数日を歩き心身共にヘトヘトに疲れ果てている。我々が着いたところは興凱湖の南にあ

るマンゾフカ近くではないかと思われる。あちらこちらに小さな家屋がポツリポツリと見えている。こんどは初めて屋根のある飼舎の中に入れという。糞のくさい匂いが鼻をつく。こんな豚小屋のようなところで寝れるものかと思つたが致し方がない。

間もなく強制労働が始まつた。先ずコルホーズのじゃがいもの収穫作業である。このコルホーズでは、戦争のため男はみな戦争にとられて、女子、子供達ばかりが残つて、まだ畑の収穫ができていないという。広い耕地、どこにもじゃがいものつるも見えないほど枯れ果てている。スコップもない。手で掘れという。じゃがいもは瘦せた小さい粒で、食糧になるほどのものではない。収穫したものは麻袋に入れろという。いまま少し戦争が長引けばソ連は自滅していたに違いない。数日じゃがいも掘りをやらされた。それからまた移動である。草原を歩いてどこへ行くのか、さすらいの旅が続くのである。

十一月も近くなつた。寒気が身にしむ頃、ふと大きな湖のはとりに出た。知識のない兵たちは、海だ海

だ、ウラジオは近いかもしれないと叫んでは、日本に帰れるかも知れないと喜んでいた。私はこれが興凱湖（オーゼロハンカ）だと判った。ここでは斜面地の大地に穴を掘って天幕を張り、穴ぐら生活が始まった。

もう三カ月以上も風呂に入っていない。水浴もできない。その頃からどうもシラミが発生し始めた。寝ていると首すじからむずむずとはってくる。全く気持ちが悪。体が暖まると腹の付近をはい回って活動を始める。そうすると睡眠ができない。一度は経験した者でない、この苦痛はわからない。晴れた暖かい日はシラミとりである。服の首すじのあたりを裏から見るとシラミがびっしりと布の縫い目にへばりついていて、これが夜になると活動を開始して、はい回るのである。

シラミ退治はソ連では薬品もないので熱消毒より致し方がない。「サウナ」が築かれて皆が裸になって衣服を掛けて、熱をかけ一時間くらいすると衣服からシラミが下に落ちる。そうすると一週間くらいはシラミの苦から解放される。

このころからソ連兵の腕時計狩りが始まった。「ダワイ、チャスイ（時計を出せ）」と言って、時計を持っている者を探してカッパライが始まった。腕を見せる腕を見せると叫んでいる。これから毎日がこうした恐怖にさらされるのである。

初めての汽車の旅でシベリアへ

ある日、突然ソ連のカンボーイが来て、ダモイダモイ、すぐ集合せよ。秋も深まって肌寒い日が続くころであった。

我々の梯団は約一時間歩いた。子供がいたので、ここはどこかと聞こうとしたが逃げてしまった。間もなく線路のある駅付近に出た。ここでしばらく待てという。半日も待たされた。我々をどうも汽車で運ぶ計画らしい。やがて列車が入って来た。みんな有蓋車だ。二十数両を連結している。一貨車に五、六十人を数えて無茶苦茶に押し込むのだ。どこの兵なのか名も知れぬ人たちがひしめき合って乗った。鉄の扉がガラガラと閉められ、太い鉄線で十センチくらいのすきを残し

てくくられた。乗車し終わった頃に列車は動きだした。さあどちらに進むのか。兵たちは今度こそウラジオ方面に行くであろうと、はしゃいでいた。薄気味の悪い列車の中で隣の者との話もできない。やがて夜が訪れた。

どうも列車は真つ暗闇の中を走っている。小便は貨車の扉のすき間から用を足すのであるが、大便の方は駅に停車するまで待たねばならず、ほんとうに苦痛である。私が判断すると、どうも列車は北に向かっている。扉のすき間から入る夜風は身にしむようになった。

真夜中、ある駅についた。薄明るい電灯がついている。構内に列車は止まった。鉄線が解かれて扉が開かれた。用便を許されたがソ連兵が逃亡をさせないよう厳重に監視している。夜空にはつきりと北斗七星と北極星が見える。まさしく列車は北に向いている。ここでもうあきらめた。食事も与えられないまま夜半を過ぎていく。腹はますます空いてくる。再び貨車に乗れという。鉄線で扉が閉められた。そうしてガチャン

ガチャンと貨車が動きだした。

扉のすき間から外の景色を眺めていると、左側はどらも満州領らしい。照る太陽の日ざしから北に向かつて走っている。やがてある駅についた。イマンである。これは満州領虎頭の対岸の町で、ありし日は虎頭からウスリー江を越えて眺めた町を、今はイマン側から虎頭の高台陣地を眺めている。緑樹の陰に虎頭憲兵分遣隊の兵舎が見える。かつては虎頭には第四国境守備隊の陣地がソ連軍を威嚇していた。砲台がイマンをいつでも砲撃下にさらし、イマンの町を日本軍の攻撃により完膚なきまでたたく備えがあったのだ。しかし当時、日本軍は南方への転属で、虎頭の陣地も後退の準備をしていた頃で、全く威力を發揮することなくソ連軍の侵入を許してしまった。イマンの駅では時間をとるようで、食事の支給があるらしい。それ程の食事ではない。例の豆のスープである。若干の食塩を入れて煮つめたのであるが、満腹感もない。やがて再び乗車をせよという。北に向かった列車はまた前進をする。

ソ連のシベリア鉄道は旧式な機関車、貨車も古いものであった。貨車と貨車の連結器も鎖で手動、自動連結器ではない。線路は久しく手入れをした形跡もない。草は生え放題で、線路技術も原始的で右に左にゆれる。こんな国に戦争に敗けるとは残念、誠に情けないと思った。

極限の荒野イリンスコエ

十二月、シベリアの野はもう真冬である。

ある駅で下車した我々の梯団は、トラックに乗せられ寒い寒い雪原ばかりを三、四時間走った。荒野の真ただ中に古い倉庫が一軒建っていた。そこには真新しい鉄条網が張られ、四つ角には望楼が立っていた。ここがこれからの我々の収容所である。

ここは国营農場（ソフホーズ）である。中に入るとゴキブリの出でくるような小部屋が幾つもあった。約五百人の我々梯団は、各班ごとにそれぞれ部屋が割り当てられた。シベリアの師走はまさに地獄である。部屋は狭くて身動きができない。

私は若干のロシア語教育を受けていたが、できるだけ秘密にとロシア語の使用をつつしんでいた。しかし誰も通訳らしき者もないため、遂に指揮班の通訳としての役目を引き受けた。炊事場を急造し、便所を造らせる。翌朝は七時に整列せよというソ連側の命令である。炊事当番は五時の起床。六時には起床が告げられた。この頃は満州から掠奪物資の豆粕と馬糧の高梁、燕麥を与えられて、これを煮て食糧にするのである。

にわか造り鉄条網の四つ角にある望楼には四人の監視兵がマンドリン（自動小銃）をかかえて立っている。日本兵が近づくと発砲する。油断もすぎもなかったものではない。戦争に負けた哀れさをつくづく悲しく思う。

七時、皆が収容所の門を出た。道のない広野を出た。太陽の光から見ると東の方に向かっていて。一時間くらい雪原を歩くと、荒野の中にばらまきの稲がカラカラに枯れて小さな米の穂が首をたれている。ここでも人手不足で収穫ができないままになっている。ガタガタトラックが一台大きな鎌を持って来た。日本の

ような小さな鎌ではない。この鎌は両手で持って横なぐりに刈り倒す。倒れた稲は鎌のない兵隊が集めよという。そしてたった一台の旧式なコンバインに入れろという。そして脱穀された米をガタガタトラックでソフホーズ本部に運んで行くのである。

十二時、昼食時になると収容所に帰って食事、一時間の休憩を終えると再び作業場へ向かう。北風が身にしみる頃になると、作業やめの号令がかかる。今日も一日命があつたと喜ぶ。

この頃から栄養失調で倒れる者が出てきた。馬糞燕麦の食事では栄養にならない。ある日、作業を終えて帰途についた。一日の労働でヘトヘトになった体を追われる牛のごとし、ソ連のカンボーイがダワイダワイとわめく。栄養失調の兵隊が力尽きて倒れた。戦友にうながされて立とうとしても動けない。ソ連兵が進めと銃でたたき。やむなく力のある者が背負っても、一時間の道は自らが疲労し切っているので交代交代で連れて帰るのである。戦友に背負われた一人はたわ言を言うようになる。月も出ていないのに「いい月だ

ナー」とか、「東條閣下が今俺に会いに来る。そこをどけどけ」などと気が狂ってくる。こんな兵は、ようやく収容所に連れて帰ると、支給された食事をすすりながらコテンと倒れるともうそれで息の根が絶える。これが栄養失調の死の特色である。

どこの誰か私は知らなかったが、翌朝ソ連本部に伝えた。ソ連兵が来て、三人は作業に出ないでもいいから残れと言った。私と兵三人が残った。朝、作業に本隊が出て行った後に、死体を野原へ運んだ。穴を掘って埋めろという。凍てついた大地は雪の下に眠り、なかなかスコップで穴を掘るにも大きな困難が伴う。死体の骨を残すために親指の関節のところをナイフで皮を切ると指先が落ちる。それを拾って、わずかな枯れ木を拾って燃やし、これを焼くのである。こうして骨をとる。戦友が布に包んで、復員の時には遺骨として故国に持って帰ろうというのである。なかなか人体を埋めるほど掘れない。三十センチほど掘るともう埋めろという。やむなくコツコツになった死体を埋めて雪をかける。名ばかりの埋葬である。

このように栄養失調によって、今日も明日もどこかで死んで行く犠牲者の数は後を絶たなかった。こうして病死していった日本軍人は十数万から二十万人に達するであろうと言われた。シベリアの大地に葬られた死体は、翌年の春、雪解けになると哀れにも野犬や鳥の餌食になるのである。

やがて我々自身の糧秣も底をついた。満州から運んだ軍馬の馬糧など食べていると栄養がとれない。兵はみんな空腹を訴える。その頃から兵は野ねずみを捕らえることが上手になった。野原の枯れ草や藁をはねるとよくねずみが飛び出して来る。それを捕らえて野火で焼いて食べる。焼鳥ならぬ焼ねずみである。兵はうまそうに食べる。あさましい姿に哀れさを誘う。

稲刈りは約二カ月間続いた。西も東も大雪原である。その中にソフホーズが稲を作っているが、男手がないので今年の収穫もできないままであった。夜になると遙か小高い丘の中腹の道路を、毎日毎晩軍用トラックが満州から占領品、掠奪物資を山と積んで走るのがかすかに見える。ここイリンスコエの野は実に広

漠千里、満目蕭条たる流刑の地である。

栄養失調の兵は日に日に多くなる。ソ連側に休みを申し出るがなかなか許されない。ここで一年目の正月も過ぎた。いつ正月であったのかも覚えていない。

翌年二月初ころになった。赤い夕陽のシベリア、早春といえども冬の真ただ中。明朝は荷物を持って集合せよという。またどこかへ移動が始まる。行方知れぬ流浪の旅が始まる。地獄の荒野、イリンスコエよさらば。

コルホーズ ノーボクラフカの夏

五月、シベリアの雪が解けて、やがて春から夏へと衣替えをしていく。平原のあそこ、ここに草の芽がふき出してくる。小鳥のさえずりも聞こえるようになってきた。

本隊はチェリヤンザというところに駐屯し、密林に入って伐採の重労働に駆り出されていく。

私はソ連側の命令で約二十人の兵を連れてコルホーズに行けと言われた。体の弱そうな者を選んで二十人

が決められた。翌日ソ連兵の番兵が来た。早く荷物をまとめよと言う。馬車が一台あてがわれた。チェリヤンザから十五、六キロのところはノーポクラフカというコルホーズ部落があった。野原の小道を徒歩でこのコルホーズに向かった。三時間くらい歩いてようやく目的地に着いた。

ある穀物倉庫が宿舎に与えられた。板の間にアンペラを敷いて二十人がごろ寝するのである。そこは美しい絵のような部落で、古里を思わせるような景色であった。きれいな小川が流れて小魚もいた。このコルホーズでの仕事は、戦争で荒れ果てた農地の手入れである。戦後ようやく平和になったコルホーズ。生え放題の畑の草をとるのである。

やがてじゃがいもの植付け準備である。別の半分は牧草地帯の手入れ。自分はこの一隊のコマンゲール（指揮官）である。兵の仕事の割り当てが仕事で、あとは炊事当番兵が一人残って、皆の食事の準備をするのである。私は指揮官であって、ソ連側から何も仕事をせよとは言われない。全くの自由の身である。

この部落には配給所があって、牛乳と黒パンの分配をするところがあった。そこに一人の若いソ連娘が働いていた。私はこの娘と話すことを楽しみにするようになった。時々ソ連人に配給する牛乳の横流しをしてくれた。「ダワイ、マラコー（牛乳を持って行け）」と言って、バケツに一杯をくれた。それから毎日のようにそこに行くようになった。時にこの娘は、「お前は通訳か、ロシア語は判るか（ベレポーズチック、パニカットナポルースキー）、妻はあるのか（イエスチジェナー）、小さい子供は（アマーリンキー）」と話しかけてくる。子供のことになると家を思い出した。

ここには風呂もないので時々付近の小川に水浴に行った。労働は八時から五時までの八時間である。五時、労働が終わると、毎日のようにこの川に行った。泳げない日本兵もいたので、ソ連兵は、日本人は薪割りか（ヤボンスキータポール）と言った。自分にとってこのコルホーズは全くの極楽であった。牛乳は貰える。時々魚の塩漬もくれる。ほんとうにいいところ、どうせ強制労働を強いられるならば、いつまでも

ここにいたいと願っていた。終戦後、約一年を迎えようとしている。約二カ月前のホルホーズの夏も終わりに近い。一向に帰国の話もない。いつまで捕らわれの身でいるのか皆目わからない。

あるとき部落の広場で野外映画があるから日本兵も見よと言ってきた。映画はソ連の戦勝記録映画ばかり。独ソ戦の実録映画もあった。ある日、急にカンボーイが荷物をまとめよと言ってきた。馬車一台が迎えに来た。美しいホルホーズに別れる日があったのである。牛乳をくれた娘とも永久に別れである。緑の木々の林を縫って、また行方知れぬさすらいの旅立ちである。ホルホーズ、ノーポクラフカよさらば。やがてチェリヤンザ部落の本隊と合流である。新しい重労働の次の地に向かつての移動が始まるのである。

ソ連兵はダモイダモイ（帰国だ）と叫んで、早く貨車に乗れと言う。間もなく貨物列車に乗ると行方も分からないまま旧式な汽車は動き出した。明日は遠くこの空か、北へ北へとシベリアに向かつて祖国に遠ざかっていく。ダモイ（帰国）の望みなき旅が続く

のである。

「スト」を決行して指揮官を首になる

自動車工場の仕事は、満州から掠奪して来る日本の自動車の修理で多忙である。ここはソ連製のものもあるが、今ではほとんど満州よりの戦利品でいっぱい。真面目に日本の自動車を修理して敵国に渡す、こんな馬鹿げたことは面白くもない。兵たちには適当に働けと言ってやった。

この工場にはソ連人もかなりいたが、一人前の技術者はいなかった。

あるとき、この工場長が、日曜日にもかかわらず、ノルマができていないから働けと言ってきた。一週間働き続けてきている兵は疲れている。兵を働かせることはできないとカンボーイ、チンコーフに相談した。日本人びいきのこのソ連兵は、そうだ、お前の言う通りだ、いいから兵を出さないと言えと話ができた。

ソ連の工場長はソ連兵に向かつて日本兵を仕事に出

せと言っている。ソ連兵は、おれは知らない、日本人のコマングール（指揮官）が命令することだとつばねている。これは面白いなあと思っていたら、工場長は遂にあきらめて、この馬鹿野郎、馬鹿野郎と怒りを連発しながら引き揚げていった。このやりとりを聞いていた私の部下達は喜んで、一日ゆっくりと休みをとった。そしてこのストはひとまず成功を収めた。

ところが二、三日したら一台のジープに乗ったソ連将校が、我々の宿舎に飛び込んできた。コマングール、コマングールと叫んでいるので、私が出て行った。お前はコマングールか。その通りと答えた。ダワイダワイ荷物を持ってこいという。こうなることは予期していたが、こんなに早く効き目があるとは思わなかった。自分の交代者が乗ってきている。この者とコマングールは交代だという。おまけにウクライナ出身のチンコーフはどうも交代させられるらしい。さあこれに乗れという。あわただしい交代劇で、あつという間の出来事で、四十人の兵達にろくに言葉もかけずにジープに乗り込んだ。自分とソ連兵、共々ストの責任

をとられ、この自動車工場の指揮官を首になったのである。私とチンコーフは仕事をサボったという犯罪人となってどこかに連れ去られて行くのである。チンコーフに「相済まぬ（イズビニーチェ）」とこつそりささやいたら、「いや、かまわない（ニェストーイ）」と言って私を慰めてくれた。心の中でこのチョビヒゲのウクライナ人に感謝を捧げた。

約四年間のシベリアの捕虜生活において、私に好意を持ってくれたたった一人のソ連兵であった。この兵は召集兵で年令も四十歳を超えていたろう。今は満期除隊して穀物の宝庫、ウクライナの大地で平和に暮らしていることであろう。今でも黒い顔とチョビヒゲを生やした、人なつかしそうなこの人、チンコーフの人柄を思い出す。

シベリア極限の地コムソモリスクへ

九一年の歳月があつという間に流れていった。強制労働は終わりそうにない。広野の真ただ中の臨時停車場に貨車が入って来た。ダワイダワイとソ連兵が騒

ぐ。数百人の梯団が貨車に乗り込むと、また貨車の扉が僅かのすき間を残して太い鉄線で結ばれる。列車はまた北に向かって走る。

速度を増すにつれて夜の風が身にしみる。まるで牛馬の輸送である。二、三時間走ると真夜中の駅に停車する。鉄の扉が開けられる。一日散に構内に降りて用便をする。ソ連兵は遠くへ行くなど騒ぐ。遂に二昼夜を走り続けた。

ガタガタ列車は、どうも目的地へ到着したようである。とある側線に我々の列車は止まった。ひんやりとシベリアで二度目の秋の風が身にしみる。丸腰の日本軍人が列車から降りて集合している姿を見ると、敗戦国の軍隊捕虜の哀れさ、しみじみと悲しさが込み上げてくる。

かつての中国、英国、米国の捕虜達の姿とは今は逆の姿である。ここはどこだろうか、ふと見ると駅名にコムソモリスクと記してあった。

コムソモリスク樺太の線に近いところ、よくもこんな北の果てに連れてきたものだ。ここからは歩けとい

う。淋しそうな市街地を歩いた。店もなければ公園もない。三、四十分歩かされた。どうも市の中心地くらいのところ、旧ソ連軍の兵舎の跡で、ここがコムソモリスク第十四収容所であった。

私は通訳として士官室一室があてがわれた。聞けば明日から強制労働が待っている。それは二十人、四十人、五十人と各分団に分けられて、出て行く作業場は市内の建築現場、船舶の修理工事、石切山等である。

私は日本人指揮官に対し割り当てのソ連の命令を伝えるのである。衛門を出るときはソ連の兵隊が日本兵の数を確認してOKが出るとダワイイという。なかなか一回では人数の確認ができない。一、二、三と一人一人の頭数を数えてから頭を振る。四×五〇二〇という掛け算の能力がない。一度数え損なうと初めから逆戻りして数え直しをする。朝、整列して門を出るまでがなかなか難しい。そこで各分団がそれぞれの仕事場に送られて行く。私は自分の都合で今日は石切山、明日は船舶工場へとついて行くのである。

現場に着くとソ連人の監督と直接話をして仕事の要

領を聞いて指揮官に伝える、これが私の毎日の仕事であった。現場での仕事はどれもこれも重労働、特に石切山での仕事は危険極まる仕事。重い石材を掘り出し、それを側線に運び、列車に積み込むという仕事。今のような機械は何一つない。全部人間の力によって運ぶ。足場の悪いところで石を動かすことは並大抵ではない。手袋はすぐ破けてしまう。手製の手袋をつくる仕事も皆、上手になった。一日の仕事で指先が赤くなり血がにじんでくる。重量のある大きな石を動かすことは、要領の要ることである。

ここにはソ連人の囚人も働いていた。服役中のソ連人に仕事はニエハラシヨードと言ったら、ソ連はどこにいても同じことだ、八時間働いてパンを貰って寝るだけだ。ただチョルマー（監獄）は彼女のところにいけないのが痛いと言っていた。囚人ということなど、さほど気にしてはいないようであった。五時になると、もう囚人たちも仕事をそっこのけ、動かしていた石も何もかもそのまま、さっさと引き揚げてしま

こんな極刑地獄のような苦しい重労働の世界とは裏腹に、大自然の美しさはすばらしい。唐松の林、流れる小川、透き通ったきれいな水面に映る紅葉、シベリアにもこんなきれいなところがあるのか、見はるかす大平原ばかりかと思つたが、古里を想わせるような美しいところもあつた。あるとき収容所の中で美術展覧会があつた。私はこの山の景色をかつて最優秀賞を得たことがあつた。

また、あるとき海軍工廠へ行つた。海軍といつても海ではない。大河、黒竜江の流れを航行する船舶の修理工場である。ここでは工場内に入った船を磨くのである。こびりついた「カキ」を落とし、あちらこちらの赤さをきれいにするのである。今日はこれだけをやればダモイだという。大きな船体、できそうにもない仕事、兵達も適当にやっている。一部の者は散らばつた鉄板の切れ端を持ち運んで整理整頓して掃除するのである。二人で鉄板をつり上げて運ぶ。なかなか重い。下手をすると指先を切つて負傷をしてしまう。午前中、午後と二回の休憩時間がある。たつた十

五分が楽しい一時である。

第十四收容所にて

この第十四收容所で初めて屋根のある家屋の中に入られた。ようやく人間らしい寝起きができた。毎日あちらこちらの作業場に出るうちにソ連兵と仲良くなった。

あるとき、一緒に散歩に出ると言うので、殺風景なソ連の街に二人で遊びに出たが、どこに行くのかと思つたら、ある大きな建物で、真中に廊下があつた。そこに入ると左右にドア一つずつの部屋があつた。それは独身女性労働者の寄宿舎で、三交代のため昼間でもチョイチョイ部屋の中に女性がいた。ソ連兵がノックをせよというのでノックをすると、中から女性が鍵を外して扉を開けた。

日本人の私とソ連兵が立っているのびっくりしていたが、ダワイイと言って部屋の中へ入れた。年齢は二十二、三歳の娘のようであつた。たった八畳くらいの部屋に寝台とペーチカが一つ、若干のコップと小さ

な戸棚が一つあるだけで、誠に哀れな部屋だ。ソ連兵と二、三話をしてはいたがどうも今晚八時からラポータだと言っている。

私に向かつて妻（ジェナー）はあるか、子供（マリリンキー）はと聞いた。満州に妻も子もいたが今ではどうなっているか、死んだかも知れないと言つたら、同情するように私の顔を眺めていた。お茶をよばれてソ連兵と二人でその部屋を出た。

また、あるとき收容所のソ連事務所で、私はスブラフカ（伝票）の整理をしていたら、一人の将校がナターシャを呼んでこいと言つた。ナターシャはこの收容所のサニタール、女性衛生兵であつた。彼女の宿舎が收容所の前にあつた。ナターシャのところへ行くと言つたら、歩哨がダワイイと言って出ると手を振つた。彼女の宿舎へ行つたら中へ入れと言われた。彼女は出勤のための支度をしているところであつた。パダジー（待て待て）ちょっと休んでいけと言つて、赤いトマトを出してくれてお茶も出してくれた。女性の部屋に捕虜の自分を入れることを何とも思わないこと

も、大陸的な国民性かも知れない。

ここコムソモリスクでいよいよ夏が来る。最果ての地、流刑の地シベリアに夏が来て、また冬が来る。残酷な世界、捕虜とはかくも悲しいものか。逃れた妻や子は、どうしているのであろうか。生木を裂かれたような人生のまま、シベリアに埋もれていくような気がしてならない。

遂に取調べを受ける

入ッしてから何もなのまま一年が過ぎた。コムソモリスク第十四収容所での出来事である。いつかは来るものと覚悟をしていたものが遂に来たのである。

ある日、ソ連側から呼出しがあった。収容所の中央部の一室に取調室があった。前日は若い中尉が白系露人の通訳を通じて私の履歴を言えと言った。私は頭の中で一度言ったことを忘れないようにと整理をしつつ、防諜関係には関係のない庶務的な仕事をしていたと話した。

「お前は何のためにロシア語を習ったか、国境線に

いてスパイを使ったことがあるか」というのが取り調べの主眼であった。「私は人事と庶務的な仕事ばかりで、そのようなことはない」とつぶねた。「この馬鹿野郎ウソを言っている。本当のことを言え」と、中尉は怒って拳銃を手に威嚇した。始まったなと思っただ。「私も日本の軍人だ。そんな拳銃でおどされても、偽りはないことだ。これ以上話をする必要はない。何も犯罪を犯しているものではない。殺すなら殺せ、何も驚くことはない、覚悟をしている」とやり返した。若さあふれるころの自分で、今考えてみても、よくもこのようなことを言ったものだと思う。ソ連中尉（政治局）は、この馬鹿野郎とツバを吐くような態度をとった。どうにでもなれと思っていたら、「こいつは監獄だ」と言っただけで通訳と話をしていた。

「私も日本の軍人だ。中尉も俺と同じころの年齢ではないか。生意気な言葉を使えば、もうこの中尉とは話したくない」と頑張った。遂に中尉は「これで終わりだ」と言って、私を収容所の営倉に入れた。

この営倉は真暗闇の狭い一室で、この日は食事も絶

食、丸一日がこの暗闇の部屋で過ぎた。夜が明けたのか、まだなのか分からない。時間からして翌日の十時頃であろう。ガチャンと扉が開いた。「出ろ」と言う。営倉を出て行って昨日の部屋に呼出しであった。今度は昨日の中尉のほかにソ連軍政治局の恰幅の良い少佐が椅子に座っていた。

「椅子に座れ」と言った。いきなり「お前はサカイか」ときたので、「その通り」と答えた。「昨日、中尉が取り調べに当たったが何故答えなかったか」ときたので、「拳銃をちらつかせたり、乱暴で生意気な言葉を使ったので、私も腹を立てた」と返した。「お前は戦争に負けた日本の軍人である。俺はソ連軍の少佐だ。本当のことを言え」と言った。「今まで私の答えたことは間違いない。スパイを使ったこともないし知らない。ロシア語は自分が勉強したまでのことで、まだまだ幼稚だ。このくらいの言葉では専門的にスパイは使えない。万一それほど疑うならこのシベリアに憲兵がみんないるであろう、誰でも良いからここへ連れて来い。そうすれば分かるだろう。」絶対にそのよう

なことはないが、万一ソ連にスパイを使ったことがあっても今言っではいけない。

しばらく調書を書いていた中尉と通訳が、「どうもこれはほんとかもしれない」と言っていた。少佐はいきなりその調書をとって「これにサインせよ」と言う。何が書いてあるのか、ロシア語を通訳するでもなし、誠に一方的な調書である。「ダワイダワイ（急げ）」と言った。もうどうでも良いと思いい、ロシア語で坂井とサインをした。

こんどは営倉ではなく自分の部屋に帰れと言ったので、やれやれと思いい自分の部屋に戻り、大の字になって寝台に寝た。

それから何もいまま十数日は過ぎた。ある日、夕食をすませて宿舎に寝た。十一時ころ、突然マンドリンを持ったソ連兵が一人で私の前に現れた。「サカイ、ダワイ」と言っって私物を持って出ろという。何だと言ったら他のラーゲリ（収容所）に行くのだという。荷物を手製のリュックサックにつめた。俺一人かと言ったら、その通りだという。誰にも言わないで出る

という。いよいよ処刑でもされるのかと半ばあきらめて、早速荷物を背負い真つ暗なコムソモリスクの街に出た。

夜の風は無情に冷たく、星空はキラキラと北斗七星から北極星までがはつきり見える。歩哨が私の後から自動小銃を構えてついて来る。方向性が確認できないが、街の中心から東北方向に歩いている。たった一人のソ連兵、この際この歩哨にうまく一撃が加えられればと考えてもみた。血気にはやる二十七歳の青年時代の自分である。

こんなことを考えながら一時間くらいを歩いた。「遠いのか(ダリコー)」と言ったら、「遠くはない、もうすぐだ」と答えた。夜の道を歩いてやっとそれらしい建物が見えた。まさしく日本人収容所である。門にソ連兵が立っていた。門番の歩哨同士で早口で何か話をした。入口の左側にバーニヤ(浴場)があった。奥の方に入って行くと、両側に兵舎が並んで、ちょうど中ほどに小さい変わった建物があった。ここはどうも営倉らしい。ここにも門番がいた。

二人で何事かささやいたが、どうも私をここに入れると言っている。理由も何も示されないまま、ここに入れという。丸太の太い格子戸の鍵を外すと、薄気味悪い音がしてドアが開いた。番兵が「サカイ、今夜はここだ」と言う。中に入ると木製の寝台が上下二段取り付けて、毛布がたった一枚支給されてあった。

中にトイレ用の桶が一つ、小便のイヤな匂いが鼻をつく。まさに監獄舎である。部屋は同じようなものが数個並んでいた。ガチャンと音を立てて入口の窓が締めまり錠が下ろされた。遂に投獄されたのである。

私の入った部屋は二人用で既に投獄されている先輩が一人いた。獄の中を監視兵が時々ぞくぞく話をしてはいけないという。電気は十ワットにも満たない薄暗いものが外の廊下について、部屋の中は読むことも書くこともできない。全くモグラのような生活である。

夜、すきを見て先客に話しかけた。これも日本兵で、柔道二段で作業中にソ連兵と喧嘩して投げ飛ばしてやったと自慢しそうに武勇伝を話してくれた。この先輩はどここの部隊の者か判明しないまま別れてしまっ

たが、こんな程度の者を入れているところならば殺しはしないであろう。しかしッ連は油断のならない国だ。いつ銃殺するかも知れない。

食事とは名ばかり、馬の食うような豆のスープを缶に入れて、外から運んでくれる。見れば日本兵だ。話ができない。無言で出したものを小さな入り口から受け取る。こんなものばかり食っていると、やがて栄養失調となって死んでしまうのではないかと心配になってくる。こんなところで死んでなるものか。獄に憤死する口惜しさを思うと、何がなんでも生きることだ。死んではならない、死んではならないと、自らを励まして、幾日も幾日も沈黙の時を過ごす。

こんな苦しいことはない。頭の中は満州で別れた妻や子供、古里の父や母、映画のような光景が次から次へと描き出されてくる。ともすれば獄舎に幾日を過ごしたのか忘れてしまう。取り調べもありません今日もまた暗い獄舎にまた夜が訪れてくる。寒さのため熟睡できない。

シベリアの獄舎は寒し

天井のくもの巢ゆれて風の入るらし

秋が過ぎてやがてまたシベリアに三度目の冬が訪れてくる。この分では帰国どころではない。ただ自分の生命をいかにつなぐかにある。運動もありません栄養もとれない。馬糞、豆粕では栄養失調になる可能性がある。懊悩の日が続いた。

三週間くらい続いたある日、突然監視兵が扉の錠をガチャンと外した。そして「サカイ、外に出ろ」と言う。運動のために外に出してくれるのかと思った。ところが荷物を持って出ろと言う。いつでもリュックサックに詰めていたのでそれを持って出た。

幾日ぶりかで外に出た。外の風はもう寒気が迫っている。まぶしいほど目が痛い。暗い獄舎から急に明るい太陽の光に頭がクラクラときた。「こちらに來い」と言う。そして兵舎の中に入った。ここに居ろと言う。通訳だということ、働かなくてもよい。幾日かは重労働に出ないまま過ぎた。食事はちゃんと分配してくれる。話があるまでそのままよいという。

この收容所では文化活動が盛んになってきた。洋画

や展覧会、劇等も開催するようになった。暇にまかせて油絵を描いた。いつも入賞した。油絵は色粉をオリブ油で溶いて手製のキャンバスに塗るのである。この収容所では珍しく約三カ月間楽しく過ごした。

この頃から各収容所で共産主義運動が流行した。ソ連側の指導もあるが、日本人でも左側の考え方を持っている者がその指導的地位についていた。運動に伴って壁新聞というものが出てきた。それは大きなB紙大の紙に日本資本主義、軍国主義の徹底攻撃をする。またソ連の労働の尊さ、従って日本人捕虜の労働をほめたたえるというものであった。なお、憲兵や特務機関、警察官は、日和見主義者、共産主義に反対する者として、収容所内で徹底したつるし上げが始まるのである。大衆の前に狩り出されて、自己批判をせよと迫られる。こうしたことが毎晩のように行われて、さながら地獄図のごとき光景が続いた。私は幸い通訳という立場からこうした難を免れて、一度もつるし上げを食わなかった。

戦犯ラーゲリ十一分所に連行される

コムソモリスクはシベリア第一の都市で、日本軍捕虜収容所があらちこちらに点在していた。市の中心部には第十四収容所があり、その周辺に日本軍の大群が集結させられていた。

その中に第十一収容所というA級戦犯用に設けられた特別収容所があった。そこには元憲兵、警察官、特務機関、満州国省公署の職員、樺太の日本の要人達が集められていた。この収容所に集められると、もう日本への帰国はできない。永久にソ連の奴隷と化してしまふ、このような評判の重労働収容所で有名であった。

私はついにこの十一収容所に連行された。三年目の夏の出来事であった。

この収容所は小高い斜面地で近くに白樺の木々が立ち並び、見晴らしの良いところに二重に張り巡らされた鉄条網の中に、監獄そのものの建物があった。ここで、はからずも元半截河憲兵分遣隊当時の部下の古市憲兵伍長に出会った。互いにびっくりした。この収容

所には約百人が收容されていた。

この收容所でも、私はロシア語ができるので通訳をやれということでソ連側もそれを了承した。通訳と言っても仕事は明日の労働の内容、即ち現場ごとに何人ずつを出せということをもソ連側から聞いて、日本軍側の指揮官に伝える。そして私は自分の都合のよい作業場に行き、現場でまたソ連側の話を聞いて労働に服するのである。

ここは主に煉瓦工場での仕事であった。收容所の丘から二十分も降りた所の古くさい原始的な工場で、ソ連人もほとんどいない。独ソ戦で閉鎖されていたものを、日本人に操業せよというのだ。土掘りから始めて、土練り、煉瓦作り、煉瓦焼き、完成品の取り出し等、一貫した工場ではあるが、ほとんど全部が手動で働くところだった。

この頃からこの收容所でも共產主義が盛んになってきた。そうして宣伝のために壁新聞なるものが流行しだした。当時は筆や紙、絵の具が不足して、なかなか思うように書くことができない。あるとき、この收容

所には絵の具がなく、前の收容所にはこうした材料がかなり豊富にあったところから、私に以前の收容所に行って貰ってきてくれないかということになった。どうせ単独で町を歩くことは許してくれないであろうと思っただが、このことを申し出てみた。驚いたことに簡単にダワイイと言って、私一人で隣接收容所まで行くことを許してくれ、パスポートまで書いてくれた。

朝、いよいよ一人で獄舎を出た。隣のラーゲリまで約一時間かかるであろう。まず門を出るとき「俺一人で隣のラーゲリに行ってくる、たのむ」と言ったら、ここでは簡単に第一門を出た。日本軍人が軍服を着てソ連の町を歩く、これは冒険であって、また最も危険性のあること。万一途中でソ連兵にでも見つければ、逃亡兵と思われる発砲されるかもしれぬ。ストイイと言ったらすぐ止まれ、そうしてこのパスポートを見せろと教えてくれた。

隣の收容所までは約一里半はある。自分が逃げる気があるならば今だとは思ったが、それもあきらめた。あちらこちらをよく注意してようやく收容所近くなっ

た。シベリア大陸の草原を自由な身となって歩くことができた。幸い途中で誰にも遭遇しなかった。

早春のシベリアはまだ寒かった。収容所の門近くになった。ストリーイと言って歩哨が自動小銃をつきつけてきた。早速バスポートをポケットから出して見せた。ダワイイと銃口を門の中に振った。十一分所から来たから頼むと日本人の幹部に必要なことを告げた。君は一人で来たのか、よく来たものだと感じしびつくりもした。用事を済まして必要な絵の具を手にして、再びありがとうと歩哨に告げて門を出た。明るいうちに帰らないと危険だというので時間を気にしながら歩いた。シベリアに来て三年、やわらかい土の感触と初めて自由な身になった気分はまた格別である。

故郷の山河を道々思い出していた。西も東も広い草原であったが、珍しいことに十一分所だけは小高い丘になっていて、美しい白樺の林が並んでいた。やがて第十一分所に着く頃には西南方の空が茜色で、美しい夕日が満州の方向に沈もうとしていた。

三年前に別れてきた妻子が生きているであろうか。

羽があるなら満州の彼方へ飛んで行きたい、と思っ
た。

夢!!

私はある晩、初めて気にかかる夢を見た。それは故郷の肥田瀬川が増水して一本橋が危険な状態になっていた。そのとき、妻秀子と清人がその橋を渡ろうとして川に落ちた。そうして間もなく苦しい顔を上にして水の中に沈んで行ってしまった。そのとき、ハッと目がさめた。その日は一日、妻や長男清人のことが思い出されて憂鬱になった。妻や子に変わったことがなければよいが、生きていてくれればよいがと安全を祈った。しかしそのころは既に、妻や子はこの世にはなかったのである。

このラーゲリでは我々の所持品の検査がしばしばあった。万一ソ連兵に見られて取り上げられてはとう懸念もあって、この丘に来て初めて妻と清人の遺髪を白樺の下に葬った。これも何かの因縁であったかも知れない。

この収容所は戦犯収容所として一番厳しい所だと聞いていたが、それほどのもなく、ごく平凡で私自身身体力の消耗するほどの強制労働ではなかった。半年足らずでこの収容所を出てハバロフスクへと移って行った。

ハバロフスクへの移動

強制重労働の第十一分所に来てから既に半年、白樺の林に緑の若芽が出て夏が来た。またここで酷寒の冬將軍を迎えなければならぬのか。日本人は皆が絶望的な毎日を送る。そんなある日、この収容所の皆がダモイダという。ソ連側の達しで荷物を持って集合した。

午後、昼食後には出発すると言ってきた。またどこかへ移動であろう。コムソモリスクの駅駐車場に来た。既に貨車が用意されていた。一団が乗車を終えただがなかなか発車しない。夕闇が迫る頃、漸く列車が動きだした。汽車は西南方向に向かっていく。こんどはウラルを越えてモスクワの方向に連れて行くのではな

いか。貨車の中で日本兵はヨーロッパ行きだと一抹の不安を感じていた。

ところが、いつの間にか列車は南の方向に向きを変えて走り出した。夜の列車はなかなか方向が分からないが、北極星の星から方向を定めることができた。夜が明けてきた。汽車はとまった。

どうもここで下車するらしい。ふと駅名札を見るとハバロフスクと書いてある。極東第一の都市ハバロフスク、立派な建物はさすがに大きい絵のような街である。

徒歩で約一時間郊外に出た。着いたところは再び鉄条網のある収容所である。ここは第二ラゲリ。前から残っていた兵を合わせて一千人くらいはいるであろう。五百人、五百人の二個大隊の編成で、私は一個大隊の方の事務兼通訳ということで、人員の掌握と勤務の割当てであった。食券の世話から病気の世話までなかなか忙しい。

ここで同期生憲兵であった五十嵐政義君に出会った。彼は小銃事故により隻腕となっていた。私は彼を

掃除当番ということで常に收容所内に残るようになって来た。彼は戦犯ということで十四年の刑に処せられ、四十歳近くまで彼地で重労働に服し、復員して今軽井沢で不動産業を営み、帰ってから妻を貰い娘一人と細々と生活をしているということ聞いた。ソ連が、こんな不自由な身の五十嵐を十年以上も抑留することこそ、人類に対する犯罪ではないか。

この收容所はハバロフスク郊外で草原の中にあつた。二キロくらい離れたところに大河アムールが流れていた。遙か地平線の彼方満州の方向に茜色の夕焼け雲が広がって秋が迫っている。アムールの流れと秋の空との調和がまた素晴らしい。この收容所が最後の收容所であつてほしい。この收容所で四年目の正月を迎えた。

この收容所でようやく日本からの便りが届くようになった。一部の者には日本からの便りが届いた。喜ぶ者、憂う者。いつまで強制労働が強いられるものか、あちらこちらの收容所から病院に送られた日本兵、何人の日本兵がシベリアに散つていったことか、その数

は幾十万人という。帰国まで命を承らえることなく死亡していった者は、うやむやで葬り去られていった。どこの部隊の誰であつたか、それさえソ連は明らかにしない。まことに犬か豚のように日本人の生命は粗末に捨てられていった。

強制労働の煉瓦工場

コムソモリスクの第十一分所からハバロフスクに来て、ある煉瓦工場に駆り出された。收容所から三キロくらいの丘の台地にある工場で、そこには赤土の原料が豊富にあることから、ここに煉瓦工場が建設されたらしい。

戦時中は男子が兵隊にとられて労働者不足から操業が停止されていたらしい。どこもこれも機械らしいものはない。全くの原始的で工場内は全般にほこりと煤だらけ、僅かの機械部門は赤さびである。コムソモリスクの十一分所での煉瓦工場と全く同じような姿で、作業の行程はまず原料の赤土掘り作業から始まって、土の運搬、粘上作り、その煉瓦を木型に入れて、木槌

で力いっぱいいたたく、こうした煉瓦作り。できた煉瓦を乾燥室まで運搬、これを乾燥させる。ある程度乾燥したものを窯につめる。他の窯からは完成品の窯出し班が出荷の搬出場まで運搬する。こうした一貫の作業であるが、全部が人間の力に頼るもので、時代遅れの工場であった。

どの作業班もすべてノルマが課せられ、今の日本人の虚弱な身体力ではとても百分はできない。赤土掘りは一日一人でトロッコに何杯、煉瓦造りは一日何個、運搬は一人何個というように決まっている。それぞれ各部署ごとにソ連人の監督がおり、午後になってノルマに達しないとダワイダワイとやかましい。まるで牛馬を酷使するに似た奴隷仕事である。どの部門もこの部門もなかなか百分はできない。皆が疲労困憊その極みに達する。五時頃になると足腰も立たないほどへとへとになってしまう。帰りは日本製のトラック（ニッサン）に乗せられて収容所に帰る。帰るともう欲も得もない。体は汗がにじんで異様なほど汗くさい。パーニヤ（入浴）は一週間に一度くらい。

この収容所に来てからようやく黒パンが支給された。薄いパンでもとても満腹感はない。夜はクタクタになって寝てしまうが、夜中に一度や二度は南京虫に襲撃されるので睡眠不足になってしまう。この煉瓦工場は約一カ月で交代になったので兵たちは殺されなくてよかったと喜んでいた。

ダモイー、ダモイー（帰国）

この言葉は入ソ以来、既に数年間もたまされ続けてきた言葉である。ソ連は我々のラーゲリ移動に対し、前もってこれを示達しない。収容所の移動はその度に「ダモイー、ダモイー」と言っていて、私物を持ってすぐ整列せよと追い立てるように騒ぐのが常であった。ハバロフスクに来て、今度こそはもうこの収容所で最後であってほしいと念じてきた。

約半年が経った。十月も過ぎ十一月に入った。シベリアの大地の雑草がさやさやとなって秋が過ぎた。また酷寒の冬將軍を迎えなくてはならないのかとあきらめていたところが、十一月の下旬になった。

ある晩、我々の兵舎にソ連将校が「サカイ、ダモイ、ダモイ」と言つて飛び込んで来た。「お前もダモイだ」と言つた。左手に持った白い紙はダモイ名簿だ。ロシア語の横書き、約二千人の中から約半数の一千人の名前が書かれてあつた。やがて就寝前の一時、この名前のは明朝は作業に出なくてもよいと将校が伝えていった。半信半疑であつたが、ひとまずそれぞれ名前を読んで示達した。

自分の名前も確認した。ここで帰国する者と名前を呼ばれない者と悲喜こもごも。そわそわと私物を整理する者、悲しく床に就く者、消灯後もひそひそ話が続き続いた。

翌朝ダモイ組は営庭に私物を持つて整理せよと達してきた。十時頃、約一千人の者が集合した。残留組はもう作業に出て行つたので、営舎内には少数人以外残つていなかったが、我々の顔を見ると何か淋しそう顔をしていた。

全員が整列すると、「ただいまから服を脱げ、靴も脱げ」と言つて、満州から掠奪してきた真新しい襦

袴、軍服、軍靴を大中小に分けて分配してきた。一応これは本当にダモイかも知れぬと、半ば信用ができてきた。

梯团长も中隊長も班長もできぬまま、一つの集団ができた。名簿によつて名前を呼び上げて、百人になると、カンボーイがダワイと言つて数人の監視つきで収容所の門を出て行く。全部終了するとトラックもない行軍が始まつた。

収容所の鉄条網越しに淋しそうに眺めている。永久の別れであろう。私の同年兵の五十嵐曹長も残つた。残る者、去る者、人間の運命はあつてなくここで決定されてしまう。

「ダモイ列車」に乗り込む

さあダモイか、収容所の移動か、まだまだ信じられぬまま、約千人の梯団ができた。シベリアにはもう冬が目の前に迫つていた。木枯らしの吹き荒れる広野を一隊がとぼとぼと行軍をして、行方知れぬままに歩いた。もしやヨーロッパ、モスコ方面に連れ去られ

るのではないかという一抹の不安があった。約一時間歩き、やがて珍しい木立が見えて来た。

そこはホームらしいものはないが、どうも鉄道の引込線があり、そこに古びた貨車が十数両停車していた。速やかにこの貨車に乗れとソ連兵が言う。間もなく乗り込むと十センチくらいの隙間を残して、ガチャンと太い鉄線で扉が閉ざされた。扉の隙間は走行中に用便をしろという。

列車は動き出した。北に走っている。夜になった。貨車の中には全くどこの誰か、ただ日本人であるというだけで話もできない。黙々として貨車の中に入りずくまるだけである。

夜が更けると貨車の中は寒気が迫る。いつの間にか、列車はどこでどう変わったかは知らないが、どうも南へ走っている。白々と夜が明けた。友人でもない見知らぬ日本人、隣の者に話し掛ける者もない。それは互いに民主主義運動の反動としての犠牲になりたくない。そんなところから、めったに口をきかないのである。

夜になると真っ暗な貨車の中の携行パンを盗む者が出てきた。あさましい心の日本人が、シベリアにいるうちに自制心を失ってしまった哀れな日本人が、今ダモイ列車の中にいる。日本人だ、武士道であってほしい。自分の私物やカバンをしっかりと抱いていないと全く油断ができない。

やがて列車は停車した。疲れきった我々は下車した。どうもこれはナホトカかもしれない。あちらこちらに天幕が張られ、近くには収容所らしい建物が見える。幕舎の屋根の向こうには海が見える。まさしく日本海であろう。海岸には今氷が張りかけている。師走のナホトカに今帰国の船を待つ。

原っぱに降ろされた一隊はバーニヤに入れと言われた。ゴチャゴチャの混雑、悪臭の中で、五十人くらいを単位に一組三十分で入浴を終われという。裸になって板で作った風呂に入る。脱衣場の私物が心配で早く出てしまう。ソ連はシベリアの垢を落として行けという。入浴を済ますと外に出る。濡れたタオルがコチコチに凍ってしまふ。ナホトカの街はもう完全な冬景色

で、外套を着たソ連人が物珍しげに日本人を眺めている。

ダモイ者には一つの関門がある。それは狭い通路を通過してソ連将校の首実験が行われるのである。ここでオミットされた者はまた再びシベリアに押し戻されてしまう。やがて「ブンスケサカイ」とソ連将校が呼んだ。ハイと答えて前に進むと、ジロリと顔を見て、「ダワイ（行け）」と言った。やれやれこれで日本へ帰れるのかと思うと張り詰めた緊張感が一度に安心感に変わった。

波止場には小さい小舟が待っていた。はるか沖にはどうも日本の輸送船が待機している。そこまではこの小さなハシケで運ばれる。寒風の海面を輸送船に向かった。懐かしい船はまさしく日本船。ヘサキを見ると恵山丸と書いてある。

船から下げられたはしごを上って行くと、甲板にはソ連将校が乗って監視している。間もなく全員が乗船すると、数人のソ連将校が駆逐船に移っていった。駆逐船は砲口を恵山丸に向けて警戒している。静

かに恵山丸は自力で進み出した。これに寄り添うように、二隻の駆逐船がしっかりと同行して来る。それは船内での日本人が暴動でも起こさないかとの警戒である。

やがて領海を過ぎるころ、ソ連の駆逐船は汽笛を鳴らして進路を変えた。「ダスビダーニヤ」と、さよならを告げた。恵山丸もこれに呼応して大きな汽笛を鳴らしてさよならを告げた。遠ざかっていくソ連駆逐船の姿が見えなくなるころ、日本海はようやくやく暮色が迫っていた。

恨みのシベリア水久にさらば。そうして一同は甲板から船室の方に吸い込まれるように消えていった。

復員船恵山丸

波静かな日本海、この水が連なるところに故国日本がある。

今、復員船恵山丸は日本兵を数千人乗せて、すべるように日本に向かって進んでいる。甲板上から遠ざかるナホトカの港、恨み重なるシベリアの大地。恵山丸

から降りていったソ連将校の乗った駆逐船も視界から消えていった。

ようやく日本人に返った。日本人ばかりになった。

恵山丸の船倉にはむしろが敷かれ、夕食の準備ができた。我々の復員を祝って出してくれた日本料理、四年ぶりの夢にまで見た白飯、味噌汁、大根漬、これに魚、涙が出るほどうれしかった。

貨物船の船底に、四年半ぶりの獄から今解放された喜びの声が起こった。恵山丸の船員の心づくしの夕食が終わり、それぞれ満腹感を味わった。予想されていた民主主義運動の激しいアジもなく、恵山丸は静かに一路、日本に向かっている。

復員者たちは自由になった喜びをかみしめて、やがて深い眠りに入っていくのであった。しかし私は言い知れぬ不安をかみしめながら、満州で別れた妻や子の安否を気遣い、年老いた父母が兄弟がどんなに変わっているであろうか、走馬灯のように古里の景色が後から後から現れては消え、消えては現れる。夢のような一夜を過ごした。

カンボーイ（監視兵）のいない、強制労働もない気楽さ。恵山丸の船底にスクリーナーの音のみがゴロゴロと夢のように聞こえてくる。一夜は明けた。右を見ても左を見ても広い広い海原。午後になった。「アッ、舞鶴だ」と誰かが叫んだ。

遙かに南方に緑濃い松の生い繁っている島が見えてきた。十数年を離れた故国。感無量。今、日本の領土が目の前に見えたのだ。涙して甲板から手を振っている者も現れてきた。静かに船の速力が止まった。復員船は港から離れたところにいかりを下ろして、間もなく停船した。

復員局の都合で今夜は一晚、船の中に一泊することになった。目の前に栈橋が見えて、復員局と交渉が始まっているらしい。間もなく、明朝十時、上陸を開始すると伝えてきた。

日本上陸の開始

すがすがしい朝、海を渡って来る風は冷たい。師走の舞鶴の港、沖に向かって突き出た栈橋まで、小舟で

運はれる、数年間夢見続けた日本に第一歩を踏み入れた。

さあ、日本だ。四年間のソ連の獄からやっと解放された。しかし本土に占領軍の米軍がいる。どんな難題が待ち受けているのか分からない。日本であつても米軍の指示に従わねばならぬ。悲しさ、皇軍の哀れさがひしひしと身にしみている。

引揚援護局の人々も冷たい。兵舎入り口で裸にされ、いきなり白い粉を頭から振りかけられる。まるきり豚か牛馬のような仕打ち。実に腹立たしい。それが済むと簡単な身上調書。これでひとまず兵舎に入れられて休憩。そのうちに終戦後の給料を五千円くらい支給された。五年間の給料だという。金の値打ちもわからない。

それから急いで我が家へ打電した。返事が来ない。何か不幸なことがあるかという予感がした。他の復員者達は面会者が紹介され、家族の者が出迎えに来ていた。二日目になって兄二人が突然、迎えに来てくれた。永年会わなかつたせいもあるろう、二人が年をとっていることが目に見えて、淋しさが込み上げてきた。

妻や子は、父母は、と矢継ぎ早に聞いた。妻は風邪をひいているので迎えに来れない、父母は家に待っている、と兄たちは言った。しかし兄たちの言葉から、何か不幸なことが起こっていることは察せられた。貰った五千円の一部で切符を買った。舞鶴から京都に出て東海道に入ったが、兄たちとの話も途切れ途切れで、不安と焦燥の列車の旅であつた。

国破れて山河あり。車窓から見る洛北の地はもうすっかり冬の準備で、取り入れの済んだ田園風景は懐かしい古里を思い出させる。

昭和十一年、日の丸で送られ広島を発つてハルビンに入営、国に捧げた青春の十五年が過ぎた。そうして裸・貫となつて今古里に帰つて来た。淋しい帰国である。兄達もさぞお前の妻子は死んだ、母は死んだと言いつらかつたのであろう。夕方になって加茂野駅についた。部落の人たちが駅まで迎えに来てくれた。入営の時のような出征の華やかさはない。敗戦国への惨めな帰国である。喜んで迎えてくれるはずの妻や子は満州で死んでいた。母はこの年の二月に病死していた。

こうした悲しみ、胸をかきむしられるような日が続いた。

廃れた我が家、軒下の雑然たる様、破れ障子、十ワットの電球の下、我が家には年老いた父が、あばら家の中に私を待っていてくれた。僅かの恩給を当てにその日暮らしをしてきた、貧困のどん底に、あばら家を守ってきてくれた父、さあ、これからは如何にして生計を立ててゆくのか、私の第二の人生がこれから始まろうとしている。

真っ暗闇の人生のやり直しである。まず妻の在所の父母に、自分だけが女々しく帰って来たことをわびた。位牌となった妻や子の仏前に泣いた。妻の遺品の眼鏡と印鑑を受け取った。これは安田初子という妻の友人が持って帰国してくれたものを貰ったということであった。

いつまでも悲しんではいられない。明日からの生活費が必要となってくる。追われるように働かなければならぬ悲運の人生を嘆く。

昭和十一年十二月一日ハルビンの鉄道第三連隊に入

営してから昭和二十四年十二月まで十数年、波乱万丈の人生三十四歳、約半生の人生に終息を告げたのである。

【執筆者の紹介】

大正五年

父忠太郎、母ていの四男として出生

昭和十一年

中種合格、満州ハルビン第三鉄道連

隊入営

昭和十三年

関東軍憲兵隊第三期生として入隊

昭和十八年

任陸軍憲兵隊曹長

昭和二十年

入ソ、抑留生活四年

昭和二十四年

帰国復員

昭和二十八年

岐阜相互銀行入社

昭和四十四年に主婦の店瑞浪支店専務取締役就任され、素晴らしい才能で業績の拡大等手腕を発揮されるも、平成五年に遂に故人となられる。

今回、御遺族の御好意により、同氏の生涯の伝記のうちシベリア抑留の部分を発表させていただいた。

(岐阜県 鈴木 善三)